

人生会議を解体する理由：現場のモヤモヤ VS 人生会議活動のモヤモヤ

医療法人財団老蘇会 静明館診療所 大友宣

アドバンス・ケア・プランニング（Advance care planning;以下 ACP）はいつもモヤモヤしている。SudoreらはACPを「ACPは、年齢や病期を問わず、成人患者が自身の価値観、生活の目標、今後の治療に対する意向を理解・共有することを支援するプロセスである。」と定義した¹⁾が、もやもやした感じはない。辞書には「もやもや（副）一と一する ①もやが立ちこめているようで実体ははっきり分らない様子 ②解決したり明らかになつたりしないため、不安・不満などがなくなる様子。「一した空気」²⁾」とあるが、もやもやは①のようにはっきりしないこと自体を指すこともあるし、②のようにそれに伴うネガティブな感情を指すこともある。実際に臨床現場では、人生の最終段階の医療やケアの意思決定に関わる場合には、医療やケアのスタッフは臨床倫理的な対応を迫られることがあり、①も②も感じると思われる。帯木³⁾は「どうにも答えの出ない、どうにも対処のしようのない事態に耐える能力」「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」をネガティブ・ケイパビリティと定義して①②に対して積極的な意味付けを行った。

学会や研修会でACPについて取り上げられることも多くなっている。人生の最終段階の医療やケアに関わる医療専門職の間でもACPの定義付けや内容に関しては、共通言語が少なく、議論しにくい。2019年にお笑いタレントの小藪千豊さんを起用して厚生労働省が作成したポスターは炎上して配布しないことになったが、コロナ禍もあって明確な議論がなされないままになってしまった。

臨床現場のもやもやは臨床倫理的課題を検討する際に重要であり、ネガティブ・ケイパビリティとして積極的な意義を見いだせる。しかし、ACPの学術的活動や普及などの人生会議活動は共通言語を明確にし、議論ができる素地が必要ではないだろうか。

1) Rebecca L Sudore, Hillary D Lum, John J You et al. Defining Advance Care Planning for Adults: A Consensus Definition From a Multidisciplinary Delphi Panel: J Pain Symptom Manage. 2017;53(5):821-832.

2) 新明解国語辞典第7版

3) 帯木蓬生. ネガティブ・ケイパビリティ: 朝日新聞出版, 2017; 東京